

## 【学位論文審査の要旨】

### 【審査結果】

口頭試問は2018年2月6日に行われた。本論文に対しては、副題が「1970年代から何が引き継がれたのか」となっているが、ここで問題にしているのは課題が引き継がれたということなのか、それとも論理・思想が引き継がれたということなのか。「継承説」と「断絶説」が詳細に論じられ検討されていくことになるが、申請者自身はどちらの立場をとるのか、それともどちらでも風いだ遺産の立場をとる者であるのか。研究史的にはリブを境にして、女性運動の断絶という面にウェイトを置く見解が支配的であるが、こうした見解そのものがなぜ生まれてきたと考えるのか。リブが問題にした「person is political」という見方も個人化が進行する大きな流れの中の一現象であって、だからこそわたくしの問題として問を立てるという方向性の中で進んだものでないのか。といった疑念が矢継ぎ早に出された。しかし、申請者はこれらの質問に対しても、本論文の中で触れた部分との関係で論じられる部分と今後の課題として残されている部分とを分けた上で、すべてに対して的確な回答をした。

戦後の女性団体が発行していた会報やウーマン・リブの時代のミニコミ誌等については、見られる限りのものをすべて詳細に読み込んだ上での各章の分析であるので、丹念な一次資料の読み込みから始まった手堅い研究であることについては、審査員一同、まったく疑念を持つことのない研究であり、この点は高く評価している。社会運動史的にみても、今年5月革命として知られる世界的な学生運動（1968年5月）から50年の節目の年であり、本申請論文の研究テーマも、今、最もホットなテーマの一つだ。今だからこそ捉え返す価値のある問題です。それを当事者ではなく、若い世代の申請者が地道に行き、見過ごされてきた位置づけを正確にかつ説得的に論証したことは見事であり、学術的に高い評価が与えられるばかりか、社会運動にかかわる人々にも大きな意味を持つ。もちろん、ウーマン・リブをはじめ、戦後の社会運動の多くは国際的な潮流とも関連をしており、日本独自のものでもない。この点で、本論文には国際比較の視点が薄いという弱点もまたあることは否めませんが、本論文の対象となった人々はミニコミ誌を発行して、自身のある意味小さな世界を広げようとしていた人々の世界からアプローチしたものであること、それを一次資料から構築しようとしたものであることを考えれば、国際比較の問題も残された課題の一つと言って良いものであると当審査委員会は判断に至った。

その後、公開審査を行い、その際にも口頭試問の際に問題とされた点について質問が出たが、これも難なく回答し、質問者もその回答に納得していた。また、1時間半を超える活発な公開審査でしたが、すべての申請論文に対す疑問に申請者は適切な回答を行い、公開審査も拍手をもって終えた。

以上のことから、主査・副査はそろって樋熊亜衣に対して博士号、博士（社会学）を与えること認めることとした。